

考ふれば、則ち當社は韓郷防禦の神たる故に、西陲に祭り、韓國を以て社の號とし、其韓國城と稱ずるが如き、亦因て名けしならん、夫三韓の國は 神功皇后初て征伐し給ふ後 應神天皇の御宇、盡く臣服朝貢す、乃ち後世 天皇を以て 異賊降伏するの軍神とす、而して此韓國城に靈を見はし玉ふもの、因縁ありといふべし、前に所謂社家傳の三神、其祀る所以を辨ぜず、是を以て此説に及ぶ、猶博識是を正すことあらんことを欲ず、社司斜木某、

○末社 威徳大明神社 △一之宮 △天一神社 以上の三社、本社の右にあり、

早鈴神社 申地頭館より 小濱村に在り、祭神伊勢大神宮相殿瓊々杵尊、豊秋津姫命、天兒屋根命、太玉命、天細女命、石凝姥命、以上左位、常世思兼命、手力男神、玉祖命、豊盤間戸神、櫛盤間戸神、

以上右位、各木坐十俵、其早鈴とは、伊勢の大神宮を折鈴五十鈴宮と稱ずるより出しなるべし、例祭十一月初酉日、棟札に、嘉吉四年、申子、三月廿二日、奉造立、早鈴大明神社一字、大願主藤原次平とあり、慶長九年、初夏より、月を彌りて、雨ふらず、苗代水涸れて、淺芽生の焼野となり、なんとて、人の歎き大かたならざりし時、貫明公親から此神祠に詣玉ひ、雨を祈りて、歌を詠じ玉ひける、

五月雨の雲かさなりて日比ふれ
なへて早苗のうるふばうりに
山めぐる雲のさそはば雨おちて
大御田小田の早苗うるほせ

此二首の歌を書て、神廟に納玉ひしかば、即日より大雨連りに降りて、盆を覆すがごとく、封内遂に旱魃の患を免かれけ